

「形容詞・形容動詞する」文の構造と意味

大 塚 望

1. はじめに

動詞「する」は実質的な語彙的意味が希薄であり、その意味するものは単に「動作・行為」であって、どのような動作かどのような事態が生じたのかについては、その結合する要素を見なければわからないという特異な動詞である¹⁾。結合する要素は多岐にわたっているが、その中に本稿でとりあげる形容詞や形容動詞がある。「する」がこれらと結合すると形容詞は「～くする」、形容動詞は「～にする」となる。本稿では、これらを考察の対象とし、「形容詞・形容動詞する」の意味と用法、文法的機能、また「する」と形容詞・形容動詞との関係性を捉え、多機能な動詞である「する」の新たな一面を明らかにしていきたい。そして、「する」が日本語の中でどのように位置づけられるか考えていく。なお、本稿では以下、「形容詞」の表記で形容詞と形容動詞を代表するものとする。

2. 「形容詞する」の意味分析における二つの視点

まず、形容詞が動詞「する」と結合した結果、どのような意味を表すのかについて考える。森田（1977）では「CヲDニする」のDには「名詞，形容動詞語幹が来るほか、（中略）形容詞連用形を立てる形もある」とし「対象CをDの状態に変える“化成”」であると述べている。また、『日本語基本動詞用法辞典』では「物がある状態から別の状態に変える」、中北（1993）では「甘くする」が変化他動詞一語に相当すると述べている。このようにいずれも先行研究では「形容詞する」を変化を表す他動詞であると捉えている。

さらに、中北（1993）では「形容詞する」の形容詞の表すサマには、動作・作用の結果として現れるモノのサマである「結果の状態」と、動作・作用そのものの行われ方である「様態」があるとする。

先行研究における「形容詞する」の意味分析とは、まず「形容詞する」全体が表す意味、そして「形容詞する」における「形容詞」の意味、という二つの視点

で考察されていると考えることができる。森田（1977）と辞典は前者の視点のみをとり、中北（1993）では両者の視点を述べてはいるが分析は後者の視点に偏っている。この二つの視点は同時に持つべきものであり、どちらか一つの視点では「形容詞する」の意味を適確につかむことは難しい。

次の例は、「形容詞する」の結合を分断し他の要素をその間に挿入したものである。

- (1) 部屋をきれいにする。→*きれいに部屋をする。(大塚2007 p 27 (8))
- (2) 顔を赤くする。→*赤く顔をする。(同上)
- (3) 豆を甘くする。→*甘く豆をする。(中北1993 p 157 (10))

このように「形容詞する」は形容詞と動詞という二語から成るものの、形容詞と「する」を分離することは難しく、その強度な語結合はまさに動詞一語相当をなすものである²⁾。まずこの点から、意味の分析には「形容詞する」全体への視点を持つべきである。「する」だけに視点を置いても「する」自体は何らかの動作や行為を意味するだけであり、その実質的な意味はこの語自体にはないため、動詞の意味を求めることはできないからである。そして、本来二語であって一語相当になっている「形容詞する」は、形容詞が実質的な意味の分担を、「する」が文法的機能の分担を行うという点で、「形容詞する」の「形容詞部分」を分析する必要がある。同時にこれは「形容詞」と「する」との関係性を捉えるうえでも重要な視点である。

したがって、本稿では「形容詞する」という述語動詞全体の意味と、「形容詞する」の「形容詞」部分という語結合の実質的な意味との二つを同時に考えていくことにする。

2.1 「形容詞する」の意味—変化の用法—

- (4) 太郎がドアをだめにする。
- (5) 息子が会社を立派にする。
- (6) 太郎が話をおもしろくする。

いずれも形容詞の表す状態への変化を表している。(4)は「太郎」が「ドア」を「だめ」な状態に変えたことを表し、(5)は「息子」が「会社」を「立派」である状態へ変えたことを表している。この点から、「形容詞する」には変化動詞と

しての意味があることが確認される。また、変化には変化するもの、変化を引き起こすものが存在するので、変化を引き起こすものが動作主体となって、変化が引き起こされる対象（変化するもの）がヲ格名詞句となる。

そして、変化を表す用法における形容詞とは、変化の結果の状態あるいは厳密に言えば変化がどこに向かうのかという、変化の方向性を表す。結果の状態という述べ方は、変化の結果に着目したものであり、「ドアをだめにした」のようなテンスが過去の場合にはもっとも符合した述べ方であるが、「ドアをだめにする」のようなテンスが未来の場合には結果がまだ起こっていないため不自然に響く。変化には、変化の様々な局面が存在し、変化の始まり、変化の最中、変化の終わりがあり、結果という語は変化の終結部を指し示すことになる。変化事象には局面とは違う次元として、その局面全体に関わる変化の方向がある。つまりどう変化するかということであり、それは変化の始まり途中終わりのすべての段階に関わる。したがって、本稿では結果の状態よりも、「変化の方向」として捉えることにする。

まとめると「形容詞する」全体の表す意味の一つは「変化」であり、その形容詞部分が表す意味は「変化の方向」である。

2.2 「形容詞する」の意味—行為の用法—

次に、中北（1993）で形容詞の表すサマとしてもう一つ示された「様態」について見ていく。この用法については「する」の先行研究ではほとんど述べられることのなかった点である。以下は、中北（1993）で「様態」の例として出されたものである。

(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。(中北1993, p158 (19))

(8)花子はいつもきれいにしている。(同, p159 (24))

(9)先生の前では太郎は静かにする。(同, p159 (25))

(7)を動作・作用の行われ方がおとなしいと解釈しているが、一方でこれをおとなしい状態への変化と考えることもできる。つまり、太郎はふだんおとなしくないので、先生の前ではおとなしいという状態に変化する、という意味である。また、(8)はむしろ「きれい」という状態に変化した結果が残存していると解釈される。このように、「形容詞する」の形容詞が様態を表すか、変化の方向を表すかの区別はそれほど明確なものではない。一方で、様態を表すとしか解釈されな

い例もある。

(10)花子は父からもらったかばんを大切に作る。

(11)太郎はお年寄りに親切にする。

これらは、それぞれ形容詞の表す状態で動作・行為を行うことを意味しており、(10)は「かばん」を「大切に」という状態に変化させたわけではない。まして、(11)には変化を被る対象自体が存在しない。したがって、これらの例における形容詞部分は動作の様態であると言える。この場合の「形容詞する」全体の意味が、具体的に何を意味するかについては次節以降で述べることにし、ここでは変化に対して「行為」という大枠でまとめておくこととする。

このように「形容詞する」には、「話をおもしろくする」のように変化を表す用法（形容詞は変化の方向）と、「お年寄りに親切にする」のように行為を表す用法（形容詞は様態）とがあり、さらに、「おとなしくする」のように変化とも行為とも言える用法があることがわかる³⁾。それでは、この三者の関係はどのようなになっているのか、次節で考えていく。

2.3変化用法・行為用法・両義的なもの

「形容詞する」が行為を表す用法ではその形容詞部分は「様態」を表すが、その表される動作・行為のほうはどのようなものだと考えられるだろうか。普通の動詞は、その動詞自体が実質的な意味を持つために一緒に用いられる形容詞の連用形が示す意味は、それらの動詞が担う具体的な動作・行為の行われ方であり、動作の様態と言うに足るものとなっている。

(12)太郎がおとなしく食べる。

(13)太郎が親切に教える。

(12)は「食べる」動作が「おとなしい」というあり方で行われること、(13)は「教える」行為が「親切」という様子で行われることを表している。「形容詞する」の例を見てみる。

(10)花子は父からもらったかばんを大切に作る。

- (11) 太郎はお年寄りに親切にする。
- (14) 太郎は母親に冷たくする。
- (15) 倉庫の荷物は全部好きにしている。
- (16) 自由にしてください。

「形容詞する」は、「する」の意味の希薄さを結合する語によって示すとは言え、ここで示される行為の意味は「扱う、振舞う」のような意味に限定されている。「形容詞する」の様態を表す用法は、形容詞の表す状態のように扱う、振舞うという意味を表すということになる。また、他動詞の場合(10)(15)も自動詞の場合(11)(14)(16)もある。ただし、他動詞の使い方はそれほど多くはない。

次に、変化の用法では形容詞の表す状態へ「変える」という意味を表す。そして、これは他動詞に限られる(1)～(6)。

そして、変化と行為のどちらの解釈も成り立つものは、そのどちらの特徴も示しうるものとすれば、上の考察から他動詞が両方の用法にあるので他動詞の場合が両義的であると考えられるのである。ところが、両義的である(7)「太郎は先生の前ではおとなしくする」は対象となる目的語がない。これにあえて目的語を付加すると「?太郎が太郎をおとなしくする」となり文として不自然であるため、他動詞であるとは言えない。しかし、変化は、変化を引き起こすものと、その変化の影響を受けて変化するものが存在する現象であるから、変化する対象が存在しなければならぬはずである。そう考えれば、形式的には明示することはなくとも意味的には存在する変化の対象というものが考えられるのであり、それはこの文では「太郎」ということになる。したがって、変化を引き起こす主体も「太郎」であり、変化する客体もまた「太郎」であるということであり、一致する両者をどちらも示すのは重複することになるので、明示する必要がないと考えられるのである。この点で、他動詞であると言える。しかし、形式上は目的語を示せないという点では自動詞であり、この点が、様態を表す用法の解釈を受ける要因となっていると考えられる。このことを例文に示すと以下のようなになる。

【変化の用法（変化の方向）】

- (7) 太郎は先生の前ではおとなしくする。(形式的に自動詞)
 - a. *太郎が太郎をおとなしくする。
 - b. *太郎が自分をおとなしくする。
 - c. 太郎が〔自分自身を〕おとなしくする。(意味的に他動詞)

一方、行為の用法（様態）の解釈では、「太郎は先生の前ではおとなしくする」は「お年寄りに親切にする」と同様に目的語を持たない。しかし、誰に対してかという行為の及ぶ先を持っている。誰に対して「親切にする」行為をとるのか、誰に対して「おとなしくする」行為をとるのか、と言えば、それぞれ「お年寄り」であり「先生」である。行為の間接的に及ぶ相手を持つのである。これを自動詞の持つ行為の間接的対象と呼び、他動詞の持つ変化の直接的対象と区別する。例文に示すと以下のようなになる。

【行為の用法（様態）】

(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。(自動詞)

以下の表は、「形容詞する」の意味用法の連続性をまとめたものである（潜在的な要素は □ で括ってある）。

	自動詞 〔～に対して〕：間接的対象	他動詞 ～を：直接的対象
変化の用法	×	○直接的対象（話をおもしろくする）
変化の用法		△潜在的な直接的対象（先生の前で〔自分を〕おとなしくする）
行為の用法	○間接的対象（先生の前でおとなしくする）	
行為の用法	○間接的対象（お年寄りに親切にする）	○直接的対象（かばんを大切にする）

3. 共起する要素との関係性

「形容詞する」と文中で共起する要素である主体や対象が、互いにどのような関係性を持つのか分析していく。中北（1993）では「サマを生起させる主体」と「サマの持ち主」に分け「主体とサマの持ち主が一致しない場合のサマは結果の状態、主体とサマの持ち主が一致する場合のサマは様態である（同p159）」と述べている。

結果の状態（変化）と様態（行為）という両義の可能性がある(7)「太郎は先生の前ではおとなしくする」のような例を考えると、主体は「太郎」であり、「おとなしい」サマの持ち主もまた「太郎」であるので両者は一致し、様態を表し

ていると言える。しかし、この文の主体（太郎）とサマの持ち主（太郎）が一致しないということはある。そうすると、結果の状態の意味はないということになってしまうが、実際には結果の状態（変化）の意味はある。変化は変化させる対象を持つが、それが主体自身である場合も他者である場合もあるからである。この例は、主体とサマの持ち主が一致していても結果の状態である場合も見られることを示しており、この説明は十分とは言えない。

さらにこの説明に反する例が見られる。それは(10)「花子は父からもらったかばんを大切にする」のようなタイプの文で、主体は「花子」でサマの持ち主は「かばん」であるため両者は一致しないので、中北（1993）の説明では結果の状態になる。しかし、この文は結果の状態ではなく様態を表しているのである。

そこで、主体と対象の関係性について再度考察することにする⁴⁾。変化の用法で形容詞が変化の方向を示すものと、行為の用法で形容詞が様態を示すものとに分けて考える（主体は ，対象は で示す）。また、「なる」動詞文や形容詞文との関係性を見るために、→以降にそれを表示する。例文は一部変えて再掲する。

【変化の用法（形容詞：変化の方向）】

- (5) 息子が会社を立派にする。→会社が立派になる。#会社が立派だ。
- (6) 太郎が話をおもしろくする。→話がおもしろくなる。#話がおもしろい。
- (7) 太郎はおとなしくする。→太郎がおとなしくなる。#太郎がおとなしい。

変化の用法を見ると、(5)では主体である「息子」と、「立派」の持ち主である「会社」は一致せず、「なる」文、形容詞文に変換するとサマの持ち主が主格に立つ文になる。一方、両義性のある(7)は、主体である「太郎」と、「おとなしい」の持ち主である「太郎」は一致しているが変化の意味を表しうる。いずれも「なる」文との意味関係は見えるが、形容詞文とは意味的に異なる。「立派にする」ことは「立派だ」ということとは、ずれる。

【行為の用法（形容詞：様態）】

- (7) 太郎はおとなしくする。→#太郎がおとなしくなる。太郎がおとなしい。
- (10) 花子はかばんを大切にする。→#かばんが大切になる。かばんが大切だ。
- (11) 太郎はお年寄りに親切にする。→#太郎が親切になる。太郎が親切だ。

行為の用法を見ると、(11)は主体である「太郎」と、「親切的な」の持ち主である「太郎」は一致している。また両義性のある(7)は、変化の用法と同様に主体と対象は一致している。ところが、(10)のように主体が「太郎」、対象が「かばん」で一致しないものも見られる。

こう考えると、主体と対象が一致するか否かは、変化の方向か様態かを分ける要因とはなっていないと言える。

さらに、「なる」文と形容詞文を見ると、変化の用法では「太郎が話をおもしろくした結果、話がおもしろくなる」と連続性を捉えることができるが、行為の用法では「太郎がお年寄りに親的にした結果、太郎が親になる」わけではない。また、形容詞文との比較では「太郎が話をおもしろくする」と「話がおもしろい」とは変化と状態であって、示す内容が異なっている。一方、行為の用法では「太郎がお年寄りに親にする」ことは「太郎がお年寄りに親だ」ということとほぼ同様の内容になっている。つまり、変化の用法は「なる」文との連動性があり、行為の用法は形容詞文との関係性が強いと捉えることができる。

以上、主体と対象との関係性における違いが見られなかったことから、ここでは新たに、先にまとめた直接的対象と間接的对象を導入し、「形容詞する」の述語内容の「対象」と、その述語内容を行う「主体」との関係性として捉えなおすことにする。

改めて例文を確認すると、次のようになる。

【変化の用法】

主体（太郎）≠直接対象（話）(6)太郎が話をおもしろくする。

主体（息子）≠直接対象（会社）(5)息子が会社を立派にする。

主体（太郎）=直接対象（太郎）(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。

【行為の用法】

主体（太郎）≠間接対象（先生）(7)太郎は先生の前ではおとなしくする。

主体（太郎）≠間接対象（お年寄り）(11)太郎はお年寄りに親にする。

主体（太郎）≠直接対象（かばん）(10)花子はかばんを大切にする。

主体と対象がどのような関係になっているかを見た結果、変化の用法は直接対象を持ち、それは主体が、主体と異なる対象に対して変化を引き起こすものと捉えることができる。ただし、両義的な文の場合、主体が、明示されない直接対象である主体自身に対して変化を引き起こす特殊なものであると考えられる。

行為の用法は間接対象が主体と異なるものと、直接対象自体を持ちそれが主体と一致しないものがある。後者は変化の用法と同じ関係性を持ち、両者の違いは語彙的な意味によって決まるものと考えられる。そして、両義的な文の場合は、行為の用法として形容詞が様態を表す以上、何らかの対象を変化させるという側面が背景化しているのであり、そのいみでは直接対象がないと捉える用法が様態の用法であると考えることができる。

したがって、「形容詞する」において両義性のある文は主体と潜在的な直接対象が一致する文であり、一方で行為の相手を設定することのできる文であることがわかった。

4. 「～を形容詞する」を広く捉える

中北(1993)では「掃除を丁寧にする」は「丁寧に」と「する」を分離させることができることから「丁寧に掃除をする」と同義であるので、これらを考察対象からはずしている。しかし、「丁寧に」が「掃除をする」の間に割って入ったかどうかは、「掃除を丁寧にする」からはわからず、ただそこには二義性という現象が見られるだけである。この点を考えてみたい。以下に例を示す。

- (17)掃除を簡単にする。 a. (様態→:簡単に掃除をする。)
b. (変化→:掃除を簡単にする。)

「掃除を簡単にする」には、二義性があり、一方が様態を表し、一方が変化を表している。これは「～をする」を作れるものに見られ、上記のようなサ変動詞語幹だけではなく、次のような動作性の名詞も同様である。

- (18)片づけを簡単にする。 a. (様態→:簡単に片づけをする。)
b. (変化→:片づけを簡単にする。)

これらのヲ格名詞句は動作性名詞であり、それぞれサ変動詞語幹あるいは「片付ける」の動詞派生語句である。「掃除をする」「片づけをする」の語結合をなすことが可能である。このことと二義性の問題とどう関わるかといえば、「～をする」の語結合が中心になる場合には形容詞は動作の様態として働くが、「形容詞する」の語結合が中心になる場合には形容詞は変化の方向として働くことがわかる。しかし、両者は文全体の示す動作や行為という点では異なったものを示している。

「形容詞＋動作性名詞ヲする」文では動作の実質的内容はヲ格名詞句である動作性名詞によって示されているが、「動作性名詞ヲ＋形容詞する」文では動作の実質的内容はヲ格名詞句ではなく「形容詞する」全体が示す形容詞の状態への変化ということになる。つまり、(18)aの動作内容はヲ格名詞句である「片付け」ることであるが、bの動作内容は「簡単にする」が示す「簡単」である状態へ変化させることである。さらに、ヲ格名詞は対象ではなく動作内容の一部を表すことが大きく異なる点である。つまり、「片付け」という動作を行うことは確かであるが、そのやり方を「簡単」な方向へ変化させるわけである。

したがって、動作性名詞句をヲ格にとり、形容詞を連体修飾として持つ、「する」文はその語順が「動作性名詞句ヲ形容詞する」の文の場合、行為（様態）と変化（変化の方向）の両義性を持つものがあるということである。また、形容詞が様態の意味を示す場合は「する」はヲ格名詞句と結合するものであり、形容詞が変化の方向を示す場合は「する」は形容詞と結合するものである。

次に、非動作性名詞句がヲ格に立つ場合と比較する。次の(19)(20)のように非動作性名詞がヲ格の場合には、「形容詞する」は変化または様態のどちらかを表す。

(19)本を大事にする。(○様態, ×変化)

(20)コップをきれいにする。(×様態, ○変化)

また、同じ様態を表す用法でも非動作性名詞の場合と動作性名詞の場合と同じだろうか。(18)「片づけを簡単にする(様態)」も(19)「本を大事にする(様態)」も様態を表すが、(19)の動作内容は述語全体「大事にする」が示す意味であり、その動作を受ける対象がヲ格名詞「本」である。一方、(18)のヲ格名詞「片付け」は対象ではなく、動作の内容そのものとなる。様態を表す形容詞(の副詞的用法)は、「非動作性名詞ヲする」文では動作内容そのものであり、「動作性名詞ヲする」文ではヲ格名詞の示す動作の様態を示している。同じ様態といっても様態のあり方が異なっている。

以上、「動作性名詞ヲ形容詞する」の二義性と、様態を表す「非動作性名詞ヲ形容詞する」と「動作性名詞ヲ形容詞する」のヲ格名詞句の働きの違いについてまとめた。それをまとめると以下のようなになる。

動作性名詞ヲ形容詞スル → (様態：形容詞＋動作性名詞ヲスル) * 1
→ (変化：動作性名詞ヲ＋形容詞スル) * 3

非動作性名詞ヲ形容詞スル→（様態：非動作性名詞ヲ＋形容詞スル）＊2
→（変化：非動作性名詞ヲ＋形容詞スル）＊4

＊1：ヲ格名詞＝動作内容，≠対象。形容詞＝様態。

＊2：ヲ格名詞＝対象。動作内容＝形容詞スル。形容詞＝様態。

＊3：ヲ格名詞＝動作内容の一部。≠対象。動作内容＝形容詞スル。形容詞＝変化の方向。

＊4：ヲ格名詞＝対象。動作内容＝形容詞スル。形容詞＝変化の方向。

しかし、「～をする」の語結合を作ることができるヲ格名詞は動作性名詞だけでなく、非動作性名詞も実は見られるのである。以下に例を示す。

(21)リボンを華やかにする。 a. (様態→：華やかにリボンをする。)

b. (変化→：リボンを華やかにする。)

(22)パーティーを盛大にする。 a. (様態→：盛大にパーティーをする。)

b. (変化→：パーティーを盛大にする。)

このように、動作性名詞がヲ格に立つものと同様に非動作性名詞でも、様態と変化の両方を示せるものがある。様態を表す場合、ヲ格名詞は動作の対象でもなく動作の内容そのものでもない。(21)aの「リボン」は「リボンをする」という語結合で初めて「リボンをつける、結ぶ、飾る…」といった意味が語結合全体から出現するものである。またb変化を表す場合には、「リボン」は対象を表し、「華やかな」方向へ変化を引き起こすのが「形容詞する」の意味である。(22)も同様である。しかし、次例のように様態の意味を示せないものもある。

(23)湿布を冷たくする。 a. (様態→：??冷たく湿布をする。)

b. (変化→：湿布を冷たくする。)

(24)ネクタイを長くする。 a. (様態→：?長くネクタイをする。)

b. (変化→：ネクタイを長くする。)

(23)は、ぬるくなってしまった湿布を冷やすことを表す文であり、様態を表しにくく両義性を持ちにくい⁵⁾。(24)も様態の意味が出にくい例である。この点が、「～をする」の語結合を持つ文における動作性名詞と非動作性名詞の違いである。上

記のまとめにこの点を加えると以下のようになる。

非動作性名詞ヲ形容詞スル→（様態：形容詞＋非動作性名詞ヲスル）＊5

＊5：ヲ格名詞＝動作内容に関わるもの，≠対象。形容詞＝様態。

5. 変化動詞と「形容詞する」―結果構文との関わり―

ここで、実質的な意味内容を持つ動詞でかつ変化の意味を示すような動詞（変わる，作る，塗る，切るなど）と、実質的な意味はほとんどなく、形容詞や形容動詞と結合することによって変化の意味を示すようになる「形容詞する」との違いについて考察する。

変化動詞が連用修飾成分と共に起ることによって結果を表すような構文は「結果構文」と呼ばれ、これまでさまざまな研究がなされてきた。本稿で扱っているような、形容詞が副詞的に働き変化の結果の側面を表すものも取り上げられている。そこで、語彙的意味のある変化動詞を持つ結果構文と、希薄な意味しか持たないため結合する形容詞によってその実質的な意味を示す「する」文とが、その変化と結果のあり方において、どう異なるか考察する。

結果構文の包括的研究としては仁田（2002）があり、日本語の副詞的表現全体をとりあげ多くの事例をあげながら分析・記述を行っている。また、結果構文について詳細に述べているものに宮腰（2007）があり、結果を表すような文成分を広く結果句と呼び、日本語における結果構文について先行研究を詳細に分析しながらその定義と分類を提案している。その他、多くの先行研究が見られるが、副詞的な修飾成分に焦点が当たっているために、動詞については一般的な語彙的意味を持つ実質動詞に限られ、「する」動詞が用いられた用例をこの中に見出すことはできない。しかし、「する」という動詞に対して形容詞が連用修飾成分として働くことは以上の考察でも明らかなため、結果構文の分析の範疇に入るものである。また、本稿の立場から言えば、こういった一般的な実質動詞と連用修飾成分との関係性と、「する」動詞とそれとの関係性を比較することによって、「する」の姿がより明らかにできるはずである。したがって、特に宮腰（2007）に見られる種々の結果構文の例をもとに、「する」がどう位置づけられるか検証していくことにする。ちなみに、宮腰（同）では「する」動詞文は一例もなく、すべて実質的な意味を持つ変化動詞について考察している。

5.1 動作を被る対象の変化

宮腰（2007）は、結果句が状態描写しているモノの種類に応じて4つのタイプに分類しており、「形容詞する」はその中の「被動作主志向」のタイプに該当する。つまり、行為が遂行された結果ある影響を被るモノである「被動作主」に対して形容詞が状態描写しているとされるものである。具体的には「一郎が壁を白く塗った」の「白く」は「(壁をペンキで) 塗る」という変件事象の結果相におけるモノ（壁）の状態を表しており、壁は行為の影響を被ったモノなので被動作主志向の結果句となると考えている。この説明は妥当なものだが、「する」をこの例にあてはめて作ると以下のようになる。

- (25) a. 一郎が壁を白く塗った。(宮腰2007,p102)
 b. 一郎が壁を白くした。

(25) b に宮腰（2007）の説明を用いると、「『白く』が『(壁をペンキで) する』という変件事象の結果相におけるモノ（壁）の状態を表しており」となりおかしな説明となる。「塗る」は単独でどのような変化が起こるかについて明白であり、その動詞自体が持つ変件事象がどのような結末を迎えるかについて述べるのが可能であるという語彙的な前提がある。しかし「する」にはそのような実質的な変化の意味は持ち合わせておらず、したがってそれが変化を表すことになるのかさえ単独ではわからないのである。語彙的に変化の意味を持つ実質的な動詞と、語彙的に変化の意味を持つか定かではない仮定的な動詞との違いが両者に見られる。さらに後半の説明「壁は行為の影響を被ったモノなので被動作主の結果句になる」における、その「行為」とは「する」ではなくあくまでも「白くする」なのである。「白くした結果白くなった」とは重複であり、こういった形での説明ができないことに「形容詞する」の特徴がある。この点は仁田（2002）で、「結果の副詞」の確認方法として「N {ガ/ヲ} + 結果の副詞 + V → Vした結果, Nハ + 結果の副詞 + {ダ/ニナッタ}」をあげている。これに上記の例を入れると「壁を白くした」→「した結果, 壁は白くなった」となり、言い換えが可であるとは言えない。しかし、この例の「白く」が結果を表すことは確かなので、この説明があてはまらないことになる。

5.2 産出される対象と変化—「する」文の二義性—

また、「花子はパイを美味しく焼いた」は「花子は美味しいパイを焼いた」の

文と交替可能であるという特徴を持つとされる。一方「壁を白く塗った」は「白い壁を塗った」と交替不可能であるために、両者の結果構文は異なるタイプのものとして分類されている。

(26) a. 花子はパイを美味しく焼いた。(宮腰2007, p105) →花子は美味しいパイを焼いた。

b. ?花子はパイを美味しくした。→*花子は美味しいパイをした。

(27)花子はきんぴらを辛くした。→*花子は辛いきんぴらをした。

(28)花子は卵焼きを甘くした。→*花子は甘い卵焼きをした。

いずれも連体修飾の形の文と交替不可能であり、(26) a の結果構文とは異なるように見える。しかし、これらはそれ以前に形容詞と動詞の結合が強いために、両者を引き離して連体修飾構造の文に直すことができないのである。統語的操作による比較はできないものの、これらの「する」文が「壁を白くする」のタイプの文（被動作主志向）とは異なることは、対象と変化との関係性の違いから明らかである。(26) a は、宮腰 (2007) では「産物志向」のタイプに分類され、行為が遂行された結果、生み出されたモノの状態を描写しているとしている。(27)も「辛くする」行為の結果、生み出されたモノである「きんぴら」の状態が「辛い」のである。同様に、(28)は「甘くした」結果生み出されたモノである「卵焼き」の状態が「甘い」のであり、新しく産み出されたモノが対象をとっている。

それでは、(27)「きんぴらを辛くする」と「きんぴらを辛く作る」はまったく同じ意味を示すと言えるだろうか。「作る」文の「辛く」は「作る」行為の結果できあがった「きんぴら」の状態を示しており、対象であるモノは動作の結果生み出され、動作以前には存在しない。一方、「する」文は、対象となるモノが動作の結果生み出されたのではなく、動作以前にすでにできあがっていたモノであって、それを「辛く」変えたとも解釈される。この解釈は「被動作主志向」であり、このような解釈は「作る」文にはありえない。しかし、先ほど述べたとおり「辛くする」行為は変化でありながら同時に対象である「きんぴら」を「辛いきんぴら」に新しく作りだしたとも解釈されるので、「産物志向」でもある。これが、よりはっきりする例は「今日のきんぴらは辛くしてくれ」のような文で、これから作り出される産物であるきんぴらについて述べている。したがって、「する」文は、「産物志向」とも「被動作主志向」とも解釈されるものである⁶⁾。(28)も同様に、対象は産物とも被動作主とも解釈される。

5.3 「形容詞する」の多義性

ここでは、変化動詞文との比較から、「形容詞する」述語が示しうる変化の意味の多義性についてまとめる。前節の二義性は、「形容詞する」述語の「変化」という一つの意味に、形容詞部分の描写する対象が「被動作主」と「産物」の二つが考えられるというものであり、本節での多義性は「形容詞する」述語の意味自体が複数あることを示すものである。

- (29) 太郎が壁を黒くする。
- (30) 花子が粘土を小さくする。
- (31) 花子が髪をきれいにしてきた。

どのような意味をこれらの文から読み取るだろうか。(29)は意味として「汚す」「塗る」「変える」などが考えられ、(30)は「まとめる」「分ける」など、(31)は「洗う」「切る」「結う」などが考えられるのである。これを実質的な意味を持つ動詞に替えた場合は、その動詞の持つ意味に文の意味は限定される。

- (29)' 太郎が壁を黒く {塗る／汚す／変える…}。
- (30)' 花子が粘土を小さく {まとめる／分ける…}。
- (31)' 花子が髪をきれいに {洗って／切って／結って…} きた。

「塗る」は「汚す」ことではないし、「まとめる」は「分ける」ことではない。「洗う」「切る」「結う」はすべて異なる動作である。しかし、これらすべての動作・行為を共起する要素にしたがって表しうるのが「する」という動詞であることがわかる。その意味の限定は、コンテキストによってなされる。「形容詞する」文は、形容詞の対象に関わる意味のあり方、さらに動詞自体に関わる意味のあり方の、二方向から、多義性を示すものである。

以上、先行研究における結果構文から「形容詞する」を考察した。その結果、結果構文の説明は「形容詞する」にそのまま用いることはできないものであった。その理由は、これまで述べたとおり動詞としての振る舞いが異なることによるもので、「形容詞+変化動詞」とは異なり、「形容詞する」ではじめて変化を表すのであり、その結合の強度は実質動詞としての変化動詞の場合よりも高いと考えることができる。また、形容詞と対象との関係性の違い、動詞の表す動作・行為の

多義性などを指摘した。したがって、結果構文の研究においても「形容詞する」はその他の動詞と同じ扱いはできない。また、結果構文では、「結果」をキーワードにまとめているが、「する」はあくまでも実質的な意味の希薄な動詞であるために「する」行為の結果、結果の副詞・結果句の状態になったとは言えず、結果構文で言う結果と同義に捉えることはできない⁷⁾。そこで、本稿では、結果ではなく「変化の方向性」と名づけた⁸⁾。

6. アスペクトとテンス

ここでは、アスペクトとテンスの観点から「形容詞する」文を考察する。これまで、見てきたとおり、その表す意味、対象と形容詞の関係、形容詞と動詞の関係などからアスペクトやテンスのあり方も多様であることが考えられるのである。

6.1 動作（様態）の用法における「形容詞していた」

中北（1993）では、「過去の一時点で実現した一回的なことがら」として表現した場合、結果の状態を表す場合は過去形「シタ」にすることができるが、様態の場合は過去形ではなくアスペクト表現を用いて「シテイタ」にしなければならないと述べている。次がその例である。

(32) その日に限って、花子は卵焼きを甘くした。(中北1993, p160) (結果の状態)

(33) その日に限って、太郎は {*おとなしくした／おとなしくしていた}。(同) (様態)

しかし、これは「過去」だけでなく、「現在」の一時点で実現した一回的なことがらにおいても同様である(33')。さらに、(34)のように同じ様態の意味を表すものでも「シタ」が可能なものもある⁹⁾。

(33') 今日に限って、太郎は {*おとなしくする／おとなしくしている}。(様態)

(34) 太郎はお年寄りに {親切にした／親切にしていた}。(様態)

様態を表す場合に「シテイタ」になる理由を、「様態は動作・作用そのものの

行われるサマであり、動作・作用の始まりとともに生じたサマは動作・作用の終わりとともに消滅する（中北1993, p160）」からであると説明している。また、「Aスルというコトがその時点では実現していない假定表現などの場合は、まだそのサマも生起していないのでこの違いがあらわれない（同）」として、「太郎は腕白で仕方なかったが、花子先生に注意された時だけはいつもおとなしくした（様態）」の例をあげている。しかし、この例は「注意された時」に限って、「おとなしく」ふるまったということであり、過去のテンスは話者が現在という時間軸上の一点に立って、過去にまなざしを向けて述べる場合であり、現在時からすれば実現されたことを表している。しかも、これは実現か非実現かといえ、ば、「花子先生に注意された時」とともに実現することを表している。様態の解釈にはそこに変化の解釈の可能性を持つものもあることを述べたが、「おとなしくする」は、アスペクト形式を付加しない場合には様態よりも変化の局面が前面に出てくるのであり、「おとなしくした」は様態よりもむしろ「おとなしくなった」ということを意味している。そして一時点における実現を表しにくいようである（「* {その日／昨日／3時頃}, 太郎はおとなしくした」）。これは、変化と様態の二義性を持つ文だけでなく、様態のみを表す文でも似たようなことが言える。「男は形見の壺を大切にした」は、「*その日, 男は形見の壺を大切にした」と一時点では不可となる。また、一時点ではないということは、現在、あるいは過去という広がった時間において、主体がそのような動作・行為を行うということになり、次のように全てのテンス・アスペクトが可能となる。あるいは、主体を主題化し、それがどのような属性を持つか示すような文としてル形で現在を表す。

- (7) 太郎は先生の前では {おとなしくする／おとなしくした／おとなしくしている／おとなしくしていた}。

6.2 「形容詞している」文のアスペクト的意味

次に、テイルにおけるアスペクト的意味を確認していく。次章で、形容詞文との関係性から改めて述べるので、ここでは簡単に記述する。

まず、「動作の継続相」を示すものとしては行為（様態）を表す用法のもの、例えば「花子は父からもらったかばんを大切にしている」「太郎はお年寄りに親切にしている」などがある。また、変化（変化の方向）を表す用法のもの、例えば「花子が粘土を小さくしている」「太郎がドアをだめにしている」などがある。後者は変化動作の継続とも言える。

次に、「変化の結果の継続相」を示すものとしては変化（変化の方向）を表す用法がこれにあたり、例えば「顔を赤くしている」「目を丸くしている」「髪を長くしている」などがある。変化の用法は、その変化の変化過程を表すテイルと変化の結果残存を表すテイルが可能である。

そして、当然、この両方の意味を表しうるものもあり、例えば「一郎が壁を白くしている」は白くしつつある動作の継続相、白くしてしまった結果状態の継続相のどちらも文脈によって示しうる。他に「花子が髪をきれいにしている」「太郎は先生の前ではおとなしくしている」などがある。変化の用法または、変化と行為を表す用法のものが見られる。変化結果の継続相を表す場合は、主題化されるほうが自然である。

以上の、三つのタイプはいずれも「形容詞している」だけが決定するのではなく、特に対象となるヲ格名詞がどのようなものとして述語と関係するかによって、そのアスペクト的意味が決定されるものである。「目を丸くしている」は変化結果の継続相を表すが、「お餅を丸くしている」は動作の継続相を表し、「後ろ髪を丸くしている」はその両方の可能性がある。

次に、アスペクト的意味しか表さないものがある。以下に例をあげる。

(35)太郎は元気に {している／*する／*した}。

(36)太郎は忙しく {している／*する／*した}。

(37)太郎は恨みがましく {していた／*する／*した}。

(38)太郎は英語を得意に {している／??する／??した}。

これらはル形・タ形が存在しない、あるいは言いにくい。意味的には形容詞文の「太郎は元気だ」「太郎は忙しい」「太郎は恨みがましかった」「太郎は英語が得意だ」と同じであり、変化や動作の開始も終了も表すことのない、ただ現在あるいは過去の時点での状態を述べている。

7. 「形容詞する」文と形容詞文との関係性

前章では以下のような例をあげて、「形容詞する」という動詞文が形容詞文と同じ意味を表すことを述べた。またそれは「形容詞している」と「形容詞一語」とが置き換えられる（格の交替のあるものもある）ということでもある。

(2) 子供が顔を赤くしている。→子供は顔が赤い。

(39)彼女は髪を長くしている。→彼女は髪が長い。

(35)太郎は元気になっている。→太郎は元気だ。

(36)太郎は忙しくしている。→太郎は忙しい。

形容詞文も「形容詞する」文も、どちらも形容詞を述語内に持つために、当然ながら意味的な近似性があるが、「形容詞する」はその結合度の強さからも動詞一語相当として述語の役割を担っており、動詞でありながらも形容詞の性質を示しているという点が特徴的である。

「形容詞する」は動詞であるために、動きを表す。そして、ル形やタ形は動きの開始の局面や終了の局面を表すために、状態を表さない。この点が動詞文である「形容詞する」文と状態を表すのを主たる機能とする「形容詞」文の違いである。

(2) a. 子供は父に会うと顔を赤くした。→#子供は父に会うと顔が赤かった。

b. 子供は怒ると顔を赤くする。 →#子供は怒ると顔が赤い。

「赤い」への変化を表す「赤くする」が成立した結果が継続する形で状態を示すようになる「赤くしている」が「赤い」に通じるものなのである。また、「する」がアスペクト形式を持つことによって、その変化の過程を暗示することとなり、「赤くしている」文では単なる状態だけでなく、その発生と消滅を含んだものとして、現在の時点で「赤い」ことを示すこととなっている。(39)「髪を長くしている」と「髪が長い」との類似性も同様である。

一方、前節でも述べたが(35)(36)はその動作の開始と終了を含むことはなく、状態だけを差し出している。その点では形容詞文と同じであるが、一時点における状態という点では形容詞文のほうが強く、「形容詞する」文はテイルのもつ継続性をいくらか示しうるといった違いがあった。

それでは、「形容詞する」文のすべてがテイル形で形容詞文との置き換えが可能かという点、そうではなく、形容詞文と意味が異なるものも見られる。ここでは、特に形容詞文と置き換え可能か否か、形容詞文との関係性を探っていく。

7.1 「形容詞している」の意味と形容詞文—アスペクト的意味—

「形容詞する」のテイル形が形容詞文と関係性があることがわかった。ここで

は、テイルの意味と形容詞文との関係について詳細に考察する。

7.1.1 変化の結果の継続（変化の方向）

テイルのアスペクト的意味として、変化を表す用法の場合、その変化の結果が残存していると考えられるものがある(2)' (39)。形容詞文と比べるために例文を加える。

(40)花子はスカートを短くしている。→花子はスカートが短い。

(41)今日は大根を安くしてるよ。→今日は大根が安いよ。

(42)花子は目を丸くしている。→#花子は目が丸い。

変化が終了して、その結果が残存していることを表しているのが、形容詞文と似ている。ただし、(42)のように慣用句的な表現で、形容詞文との意味が異なっているものもある。

7.1.2 変化の継続（変化の方向）

(43)目の前でシェフがパン生地をどんどん大きくしている。→#パン生地が大きい。

(44)シェフがピザを薄くしている。→*シェフはピザが薄い。

(1)' 花子は掃除機を持って部屋をきれいにしている。→#花子は部屋がきれいだ。

このように、まさに変化が進行中であることを表す場合には、進行中であることと状態であることには大きな差があるのは当然であり、形容詞文との関係性はないと言っていい。これらの例はいずれも変化しつつある様子が描写され、動作性の強い文であると考えることができる。

前章でも述べたが、「形容詞している」が様々な文脈の中に出現して、それらの助けによって、変化結果の継続あるいは変化動作の継続を表す。そのうち、形容詞文と関係性があるのは前者であり、(40)「スカートを短くしている」も針と糸を持ってスカートの裾上げをしている最中であることを示す文ではなく、その動作の結果が残存している文が「スカートが短い」と似たものとなる。

7.1.3 動作の継続（様態）

様態を表す「形容詞する」は、テイル形になった場合、動作が継続中であることを表す。すでに変化を表すテイルは同様に動作の継続を表し、形容詞文と関係性が無いことを見た。進行している最中の動作はその動作性の強さゆえに、形容詞文とは異なるものと考えられる。しかし、様態を表すテイル文には継続中の動作でありながら、形容詞文と言い換え可能なものが見られるのである。

- (45) ちょっと子供が騒がしくしているから、電話切るね。→ちょっと子供が騒がしいから、電話切るね。
(46) うるさくしていてよく聞こえない。→うるさくてよく聞こえない。
(47) ちょうど不機嫌にしているみたいだ。→ちょうど不機嫌みたいだ。

(45)は、「騒がしい」様態で「子供」がふるまっていることを表しているという点で、動作が進行中であると捉えることができる。今、まさに「騒がしく」行為している最中である。しかし、この文の実質的な意味は動詞ではなく形容詞にある。そのため、進行中の動作はそれが進行している過程であることを示しても、意味的に形容詞に依存するので結果的に形容詞文と同等の意味を示す。つまり、変化しつつあるという動作ではなく、一定の動作が続いているだけの一定の有り様を差し出すものであり、動作性は弱い。

しかし、様態を表すテイル文がすべて形容詞文と言い換え可能であるというわけではない。

- (11)' あ、太郎がお年寄りに親切にしている。偉いな。→*あ、太郎がお年寄りに親切だ。
(14)' あれ見て、太郎が母親に冷たくしてる。→*あれ見て、太郎が母親に冷たい。

動詞文は眼前の様子を描写している文（状態描写）であり、形容詞文は同じ意味を表そうとすると形容詞文を使うことができない。逆に言えば、このタイプの形容詞文は眼前に展開されている様子を捉えて、その人物の状態を述べることはできないということになる。そして、その形容詞文が何を示すかといえば、主体の持つ属性を述べるという機能（属性叙述）を持っているのである（その場合、より自然なのは有題文）。このタイプと限定したのは、先述の形容詞文は眼前の、

現在展開しつつある状況について述べるのが可能だったからである。¹⁰⁾

7.1.4 その他

状態描写ではなく属性叙述の文であって、形容詞文と言い換え可能な「形容詞する」文を見ていく¹¹⁾。

(7) 太郎は先生の前ではおとなしくしている。→太郎は先生の前でおとなしい。

(9) 先生の前では太郎は静かにしている。→先生の前では太郎は静かだ。

(38) 太郎は英語を得意にしている。→太郎は英語が得意だ。

(46) この子は家ではうるさくしている。→この子は家ではうるさい。

(47) 祖父はいつも不機嫌にしている。→祖父はいつも不機嫌だ。

これらのテイル文は、眼前に展開される進行中の動作ではなく、主体が持つ特徴・性質としての属性を叙述するものである。アスペクトは、動作のある局面にあることを示す文法的カテゴリーであるが、これらは動作のどの局面にあるかということを超えている¹²⁾。それは副詞「いつも」がついて、主体がその動作を広げられた現在時制の中で継続していると解釈することも可能だが、それはすでに形容詞文がその時制の中でその状態であることを指し示しているのと変わらない。ただ、形容詞文の場合には、「いつも」「人前では」などの時や場面の限定がなくても構わないのに対し、「形容詞している」文ではこれらの要素がないとすわりが悪い場合もある。それは、継続相の他の意味が現れてしまう可能性があるため、あくまで属性叙述であることを補足成分であるその他の文の要素に求めたからではないかと考えられる。また、属性の場合には、誰かについて取り上げて述べるという態度をとるために、文としては有題文のほうが自然である。

(11) 太郎はいつもお年寄りに親切にしている。→太郎はお年寄りに親切だ。

(14) 太郎は母親にいつも冷たくしている。→太郎は母親に冷たい。

以上、「形容詞する」文と形容詞文との関係について見てきた。「形容詞する」文はテイル形で形容詞文との近似性を示すことがわかった。さらに、その「形容詞している」文は、まさに眼前で進行している変化の動作を表す場合には、その動作性の強さゆえに形容詞文と言い換えができない。しかし、同じ進行中の動作で

あっても様態の場合には、動作性が弱い場合には形容詞文と言い換えられる。また、主題の属性を表す様態の場合には形容詞文に近似する。したがって、「形容詞する」文は、その動作性が弱まるときに形容詞文と同じ特徴を示し、動詞でありながらも、その意味の希薄性によって形容詞のような特徴を帯びることが可能になっていると考えられるのである。これもまた、「する」の持つ多様な機能の一つとして捉えられるものである。

7.2 「形容詞する」の意味と形容詞文—テンス的意味—

「形容詞する」のル形とタ形のテンス的意味を確認したい。形容詞文と関係性が見られるのはテイル形であることがわかったが、ル形とタ形では関係性が見られないだろうか。

- (48) a. 花子は髪を短くする。→#花子は髪が短い。
 b. 花子は髪を短くした。→#花子は髪が短かった。

変化の用法の場合には、ル形が変化の開始を表し、未来を表す。形容詞文の未来時制は「明日」という時の副詞によって支えられたとしても「*明日花子は髪が短い」で、そのままでは未来を示すことができない。また、タ形は変化の終了を表し過去を表す。形容詞文は過去を表すが単にそういう状態であったことだけを示している。

- (11) a. 太郎はお年寄りに親切にする。→太郎はお年寄りに親切だ。
 b. 太郎はお年寄りに親切にした。→太郎はお年寄りに親切だった。

様態の用法の場合には、ル形は現在を表し、通常有題文で属性を表す。形容詞文は、終止形で現在を表し、やはり有題文で属性を表す点で類似している。また、タ形は過去の行為を表し、形容詞文は行為ではなく状態を示すが、どうだったかを表すという様態の面では、類似していると考えられる。

「形容詞する」文の、変化ではなく様態を表す文は、形容詞文との類似性が見られると考えられる。それは有題文で属性を表し、示すテンス的意味が未来ではなく現在である点に共通点が見られるからであろう。

7.3 形容詞文との近似性—人称制限, 程度副詞修飾, 比較表現—

ここでは、さらに形容詞との近似性を見るために、これまでも用いた人称制限と程度副詞による修飾、比較表現について簡単に確認する。拙稿(2007)では、「形容詞する」文として「部屋をきれいにする」「顔を赤くする」の二例だけを取り上げ、いずれも変化を表すものであった。ここでは、新たに動作を表すものも加え検証することとする。なお、ル形は変化や動作の開始の局面を描くため動作性が強く、形容詞の状態性と相容れない。そのため、テイル形によって形容詞との近似性を構文的に確認していく。

7.3.1 人称制限

人称制限は感情・感覚を表す形容詞文に特徴的であることが知られている。「形容詞する」文においては、まず、感情や感覚を表す「形容詞する」があるかどうかということが焦点になる。これまで見たとおり、「形容詞する」には変化と動作の二つの用法があり、いずれも感情や感覚をそのまま表出する機能とは異なる。例えば感情形容詞の「嬉しい」「悲しい」「痛い」は「する」と結合しないものもある。¹³⁾

(49)*娘のことばが母親を嬉しくしている。

(50)*冷たい態度が人を悲しくしている。

(51)*注射が腕を痛くしている。

このように結合すること自体も難しく、感情の動きの様態というのはそもそもありえず、感情の変化は「なる」を用いて「する」を用いない。あえて、意志を持ってその感情への変化を起す場合には「させる」使役形のみを用いることとなる。

(49)'娘のことばが母親を嬉しくさせている。(喜ばせている)

(50)'冷たい態度が人を悲しくさせている。(悲しませている)

しかし、動詞「喜ぶ」「悲しむ」の使役形の方が使われるうえに、これらは感情をまったく表出していない。したがって、感情を表すような「形容詞する」はないと言えよう。

7.3.2 程度副詞修飾

形容詞は程度副詞による修飾が可能で、量副詞による修飾が不可能であるとの西尾（1972）から検証する。程度副詞には「非常に」を、量副詞には「たくさん」を用いる。「形容詞する」をその結合の強さと文法的特徴から一つの動詞的振る舞いをとるもの、つまり一語と考え、程度副詞による修飾の可能性を捉える。

- (51) 顔が {非常に／*たくさん} 赤い。
 (1)' 部屋を {非常に／*たくさん} きれいにしている。
 (2)'' 顔を {非常に／*たくさん} 赤くしている。
 (3)' 豆を {非常に／*たくさん} 甘くしている。
 (7)'' 太郎は {非常に／*たくさん} おとなしくしている。
 (11)'' 太郎がお年寄りに {非常に／*たくさん} 親切にしている。
 (39)' 彼女は髪を {非常に／*たくさん} 長くしている。
 (45)' 子供が {非常に／*たくさん} 騒がしくしている。

いずれも程度副詞のみ修飾が可能であり、量副詞の修飾は不可であった。これは、副詞の修飾が「形容詞する」の実質的な意味を担う形容詞それ自体に主としてかかっていくためでもあり、「する」の持つ特徴によるものである。

7.3.3 比較表現

形容詞は比較表現を作ることが可能である。同様に、「形容詞する」でも比較表現を作ることができるか検証する。

- (51)' 顔がりんごよりもっと赤い。
 (1)'' 部屋を太郎の部屋よりもっときれいにしている。
 (2)'' 顔をりんごよりもっと赤くしている。
 (3)'' 豆を砂糖菓子よりもっと甘くしている。
 (7)'' 太郎は花子よりもっとおとなしくしている。
 (11)'' 太郎はお年寄りに若い人よりもっと親切にしている。
 (39)'' 彼女は髪をかぐや姫よりもっと長くしている。
 (45)'' 子供が昨日よりもっと騒がしくしている。

このように、比較表現を作ることができ変化であれ様態であれ、形容詞との近似

性が見られた。

8. まとめ

以上、形容詞と「する」が結合して一つの動詞のように振舞う「形容詞する」について、その構造と意味を中心に考察し、文法的に多機能であることを明らかにしてきた。その用法が、変化または様態、そしてその両方を示すものの、三つに分けられること、さらに、共起する要素として主体と対象の関係性から間接対象と直接対象の存在とそれらの明示・非明示についてまとめた。また、「～を形容詞する」が語結合のあり方によって二義性を示すこと、そして、テンス・アスペクト的意味、結果構文との関わりについても「形容詞する」の特異性が確認された。また、形容詞文との関係では、テイル形の示す動作性の弱体化や属性叙述の特徴、ル形が未来ではなく現在を表す点が、形容詞文と似ていることがわかった。このように意味・用法の点でも、形容詞文との近似性の点でも、その多機能性の広がりを見ることができた。本稿では、特に「する」が形容詞という品詞、あるいは形容詞が持つ文法的特徴や意味といった分野にまで、その広がりを見ることが明らかにされた。

なお、本稿では、構文論的観点からしか分析することができなかったが、一部、形容詞文との比較で触れたように、「形容詞する」文が対人的機能として一文を発するというレベルでどのような働きを示すのかについて考察する必要がある。また今後はこの他さまざまな語との共起が可能な「する」について、その一つ一つを考察すると共に、その姿を日本語全体の中で捉え位置づけていきたい。

注

本稿での記号について、*は非文、?不自然、#意味的に対応しない、を表す。

- 1) 形式動詞、機能動詞、軽動詞などと呼ばれることがあるが、それぞれの意味する範囲は異なり単純に比較することはここではできないが、もっとも広い概念は形式動詞である。「名詞+動詞」の語結合が機能動詞であるため「形容詞+する」はその範疇外(拙稿2007)、また、軽動詞は定性制限と統語的操作の禁止が必須であり、かつそれは名詞句に限られていることからやはりその範疇外ということになる。本稿の議論は形式動詞の範疇ということになる。詳細な比較は別稿で述べる。
- 2) 村木(1991)では、語と語の結合の強さから機能動詞の研究を行っているが、その中心は「名詞+動詞」であり本稿の考察対象である「形容詞する」は「機能動詞結合に近接したむすびつき」と述べる。また軽動詞の研究もあるが(影山2004など)

「青い目をしている」に限定されている。本稿ではまず基本的な文の要素同士の関係性や意味の分析などから「形容詞する」を考察し、機能動詞、軽動詞、両者の研究の外にある「形容詞する」がどういう動詞述語であるか明らかにするものである。

- 3) 類義語「やる」の「形容詞やる」は、変化の意味は持たず、もっぱら「様態」を示す。「ゲームを楽しくする」は変化を、「ゲームを楽しくやる」は様態を示す。
- 4) 様態の用法では、「サマを生起させる主体」と「サマの持ち主」という名づけが意味的になじまないところがある。「花子はかぼんを大切にする」の「花子」は「大切」という「サマを生起させる」と言えるか、あるいは、「かぼん」は「大切」という「サマの持ち主」かという点である。「大切」というサマの感情の持ち主としては「花子」、「大切」という感情が向けられる相手として、結果そのサマを持つ「かぼん」である。そこで、ここでは中北（1993）の用語ではなく、主体と対象として捉え直した。
- 5) 「動作性名詞ヲ形容詞スル」は両義性を持つが、様態と変化のどちらかが強く意味される場合もあり、「独立を急にする」のように様態の意味合いの強いものもあるが、非動作性名詞の場合とは異なりやはり両義性を保っている。これらは、形容詞と動作性名詞との語彙の意味合いの関係によるものと考えられる。
- 6) 結果構文にも産物志向か被動作主志向かは判然としないと宮腰（2007）も述べているが、「形容詞する」文は常にどちらも示しうるという点で、「作る」のような産物志向の動詞とは異なっている。
- 7) 本稿では結果構文のうち、形容詞・形容動詞が結果の副詞として働く場合に限定してとりあげた。このほか、「する」文には宮腰（2007）の「移動物志向」のタイプもあり、その意味・用法・機能の広がりを示唆している。この点については別稿で述べたい。
- 8) 結果構文など先行研究ではいずれも「結果」と名づけているが、「壁を白く塗る」は、テンスの意味は未来であり、「塗る」動作は「白く」という方向性と並び立つ。こう考えると一概に「結果」とするには違和感がある。「白く塗る」は動作、様態という側面もいくらか持ち、一方「白くする」は「白く」と「塗る」の関係よりも「変化」の側面がむしろ強いと思われるのである。そのため、本稿では「変化の方向性」と名づけた。ただし、研究史ですでに結果の副詞との呼び方は定着している感があるため、この点は副詞の研究で考えていきたいと思う。ここでは印象に近いものを述べるだけに留める。
- 9) 本稿では形容詞・形容動詞に限定しているが、「花子は眠くて {うとうとした／うとうとしていた}。」のような例も様態を表すが、「た」「ていた」の両方が可能である。
- 10) 形容詞の分類では、属性形容詞にあたるもの（属性形容詞している）が状態描写できず属性叙述になるものであり、感情形容詞にあたるもの（感情形容詞している）が状態描写できると考えられる。属性叙述に関してはできるものもできないものもあるようなので、この点については別稿で考察したい。
- 11) テイル形でなくても、「太郎はいつもしつこくするから嫌いだ」「太郎はいつもしつこいから嫌いだ」のように太郎の属性を述べる文が可能な形もある。

- 12) 変化の結果の継続を表す場合、「花子は爪を赤くしている」は一時的な状態であるため、状態描写である。「花子は父からもらったかばんを大切にしている。／花子は父からもらったかばんが大切だ。」「母はいつも玄関をきれいにしている。／*母はいつも玄関がきれいだ。」「太郎は机の中をいつも汚くしている。／太郎は机の中がいつも汚い。」主体と対象の関係が所有関係にある場合は、形容詞文との言い換えが可能である。しかし、これらが主体の属性を叙述しているかという点では断定しきれない。一文の機能については今後考察したい。
- 13) 感覚を表す形容詞として「痛い」「きつい」「冷たい」「熱い」などがあり、これらは「する」と結合できる場合がある。「痛くしないで」「きつくしたら」「冷たくするな」など。しかし知覚そのものを表出することはないので、感情形容詞のような人称制限はないと考える。

参考文献

- 大塚 望 (2007) 『『する』文の多機能性—文法的機能—』『日本語日本文学』17, 創価大学日本語日本文学会
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『ことばの研究・序説』(1966) むぎ書房所収
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞としての『青い目をしている』構文」『日本語文法』4巻1号
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 日本言語学会
- 中北美千子 (1993) 「形容詞・形容動詞と形式動詞『する』の結合について」『国文目白』32, 日本女子大学国語国文学会編
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 宮腰幸一 (2007) 「結果句の定義と分類について—意味・機能的アプローチ—」『日本語文法』7巻2号
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語1』角川書店
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 『日本語基本動詞用法辞典』(1989) 大修館書店 小泉保, 船城道雄, 本田晶治, 仁田義雄, 塚本秀樹編

(おおつか・のぞみ, 本学専任講師)